

奇縁・好縁

——飛田就一さんのこと——

小林 茂

飛田さんとの出会いは45年前のことだが、とくに立命館大学経済学部で同僚として親しくつきあってきた22年間は、私の生涯のなかでたいへん稀有にして貴重な歲月である。

1972年、経済学部へ赴任して2回目か3回目の教授会が終り退室しようとしたとき、一人の横顔が目にとまった。その瞬間、23年の時間が頭のなかで逆回転し、それが高校2年のときのクラスメイトであることはすぐにわかった。敗戦後間もない焼け跡・闇市に象徴されるあの混乱期に改革された新制マンモス高校（鴨沂高校）で、しばしば大講堂の壇上に駆けあがって熱弁をふるっていたこの「名士」を知らない生徒は一人もいなかっただろう。

「飛田さんですか……？」近づいて声をかけた。
彼はいささか含羞のたどよう笑顔になってうなずいた。

思いがけない再会に、もう一つの偶然が加わった。2、3年後、長年の懸案であったロシア語専任教員を経済学部で迎えることになった。多くの候補者のなかに、私たちの遠い記憶につながる名前があった。この候補者は、またもやあの多彩な生徒の賑やかな高校時代に、飛田さんと私が所属する著名な仏教学者・金子大栄の子息金子宏先生担当のクラスにいたもう一人の人物にちがいがなかった。休憩時間などいつも教室後部の窓辺に立ち一点を凝視して沈黙思考風情の痩身で色白、無駄口をたたかず、いかにも頭のキレル青年がいた。

結果的には、このクラスメイト、奥村剋三さんが福井大学から移籍することになった。鋭利な洞察力と柔軟な行動力を秘めていた。

さらに、この鴨沂高校の同学年には文学部の歴史学者・末川清さんがいた。飛田さんは同クラスに在籍したことがあり、私は旧制中学とあわせて6年の同窓ということになる。かりに、末川さんが経済学部で同僚だとすれば、これはもう超常現象の世界であろう。

当時の高等学校での「クラス」は、全員そろって仲よく話しあったり肩を並べて行動することはなく、たんに便宜的なユニットとしての集まりであった。同じクラスに在籍していた一年間、飛田・奥村・小林の三人がことばを交わした記憶はまったくない。クラスを越えた枠組みのなかで、それぞれ自分の集団をつくり、主体性の確立・不条理・不連続の連続などよくわからぬことばを並べて愉しんでいた。『火垂るの墓』『アメリカひじき』『ヒロシマ』『ナガサキ』『いかに生きるか』といったようなことが共通項として頭のなかにあった時代である。飛田さんは、このとき、すでに、壇上に立ち、千余の生徒に向かって、新しい社会の秩序を説き、ヴィジョンを提

示し、青年の主體的思考と行動のあり方を力強く訴えていた（これは、私の遠い記憶のなかにある飛田さんのイメージによって推定した論題であって、当の本人は、そんなことを言った覚えはない、と怪訝な顔をするかもしれない）。

昭和4年大連生まれの飛田さんには、帰国後、病魔と闘う時間がまっていた。昭和6年～8年組で構成される聴衆にとって彼は「大人」であり、その雄弁の内容を十分理解できないものも多かったであろうが、その迫力には全員が圧倒されていた。昭和6年生まれの私も、旧制中学一年でさっそく病気になり1年遅れてしまった。昭和8年早生まれの奥村さんだけが「7年組」正統派に属していた。これも、混乱期の一面であったといえる。精神的にも肉体的にも成熟度はばらばら。学力や好みもばらばら。ところが、一方では、このばらばらの大集団の構成メンバーそれぞれが、自他を尊重する平衡感覚のようなものをもっており、おたがいが干渉はしないものの、すべてが還暦を過ぎた今も一つの統一体としてのまとまりをもち続けている。

学年がかわった昭和25年（1950）以来、おたがいがこの地上に生息していることすら意識していなかった飛田・奥村・小林の三人は、20数年の空白の後に、今度は同じ枠組みのなかで共同作業をすることになった。過去の縁でおたがいがひっぱりあい、同大学・同学部にめでたく寄り集まって席を並べるケースはあるだろうが、それは別段おもしろくはない。私たちのようにクラスまで同じ三人が、なんの道しるべもないままに見えない糸にたぐられて一つの点に合流するという事態は、ただごとではない。二つか三つの偶然が重なった単なる「鉢合わせ」にとどまらず、奇蹟であり、得体のしれない因縁であるとしかしいようがない。

ずいぶん長い間、飛田さんとつきあっていながら、哲学者飛田就一の研究内容については、ほとんど聞いたこともなければ、語りあったこともない。もっぱら、飲んだり食ったり、せいぜい世俗の「よしなしごと」やあれこれ人様のことを話題にして憂さ晴らしをし、笑いの種を見つけ喜んでいたようだ。ときには、元気づけることばをそれとなく投げかけることもあった、というのが私たちのつきあいの実態である。

山元一郎を恩師とし、ヴィットゲンシュタイン研究、「コトバの哲学」を考えることが飛田哲学の課題の基点であり最終目標なのだろう、というのが、大量の論文、著書、編書、翻訳書をいただきながらあまり読んでいない私の無礼で浅薄な推察である。

しかし、記号としての言語の役割は、semantics, syntactics, pragmatics の側面から分析・解釈することによって人間とは何かの認識に迫ることであるとする姿勢は、これまで終始一貫していると思う。飛田さんは、いつも、言語と論理の狭間にある「生き生きとしたかわり」に視線を投げかけている。

「論理は言語表現に内在的である。論理をはなれた言語表現は、ルールをはずれて走る電車のようなものだ」

「もともと言語は、人間に密着したものである。むしろ言語は、わたしたちの〈生活〉にあまりにも密着しすぎているのである。だから、言語の問題は、けっきょく、人間の問題なのかもしれない」

いずれも、飛田さんの若き日のことばである。

雄弁（ELOQUENCE）は「理性に訴える力」「感情を動かす武器」という意味をもつ。おそらくこの雄弁の実践と病魔と闘いながらの哲学研究から発芽したこの言語観に、私は深い感銘をうけた。私などは、たしかに言語に関心をもってはいるものの、きわめて情緒的で脈絡なしの非論理的・発作的・場当たりの言語行為（理解と表現）が身に染みついている。まさに、みごとに脱線しっぱなしの電車である。人間とその知的営為に対する視点が欠落した言語教育——飛田さんの厳しい叱責をうけそうである。

ところで、洒落・冗談・ヒューモア・アイロニー・風刺といった類いの一見支離滅裂な言語表現はいったいどのように位置づけ、あるいは意味づけされるのだろうか。婉曲表現は、よかれあしかれ、論理を回避しようとするものであり、やはり「遊び」「脱線」の域を出るものではないだろう。この点については、後日ゆっくり教えていただきたいと思っている。もっとも、飛田さんはとっくの昔に、このような「感性的・前言語的」な表現は異なる信号系に属する言語であると規定している。そして、コトバの哲学は、人間の生き方を機軸として、生理的・感性的な領域から思想的・論理的な高次元領域へ再編成という上昇翻訳を可能にすると同時に、逆の方向へ下降翻訳もやってのける——つまり、つねに「意味化作業」をしている——したがって、問題は、発話者や聞き手の側にどれだけの思考力・想像力・分析力があるかということだ、といともことまなげに言うだろう。

飛田さんは、優れた恩師・先輩に恵まれている。すでに築かれていた広大な知識を継承し、もって生まれた明晰な頭脳と不断の努力と熱情で、哲学者・言語教育者としての独自の道をきり拓いてきた。これまでの多くの研究業績がそれを物語っている。

私は、たまたま、彼の研究活動、とくに出版事業の取組みをはじめ、さまざまな日常の場面で彼とかわりのある人たちと同席する機会がなんどかあった。そこで感じたのは、先輩・同僚はもちろん、後輩や自分が教えた人たちを、実にたいせつにしていること、また、彼自身が周囲の人たちから篤い信頼をうけていることであった。彼と彼を囲む人たちの間には、つねに強固な一体感がある。それは、共同執筆者・出版社の人たち・後輩研究者、そして多数の教え子、とくに今にいたるまで顧問をしているドイツ語研究会の学生たちとの公私にわたる交流の場面だろうか、われる情景である。

人間を探究するものがもちうる冷徹な厳しさ、不断の探究心、こまやかな心遣い、なにげないやさしさ、飾りつけのない明るさが、多くの人たちに手をさしのべ、また、多くの人たちが彼のまわりに集まって苦楽をともにすることをいとわない。

最近の大きな成果は、飛田さんが大阪大学の友人とともに、若い研究者たちを執筆陣に加えて『哲学基本辞典』（富士書店、1992年）を出版したことである。飛田さんは若い研究者の育成をする立場にある。この辞典編纂の過程で、監修の大役を担う飛田さんは、彼のトレードマークであるドイツ製の黒い大型かばんに、いつも大量の原稿を入れていた。暇をみつけては丹念に目を通し、検討を加えていた。複数の人たちの手になる原稿を編集の基本方針に即して、調整・統一していく作業はきわめて困難である。若い研究者が、思いきり力をふりしぼって記述した定義・解説の

躍動する文章を評価しながらも、飛田さんは黙々と、できるだけ「わかりやすい文章」になるよう考え考えて手を加えていく。その姿には、若い哲学者を育成するだけではなく、哲学が新しい状況での要望に応えることによって、学習者の裾野を広げる自らの使命を果たそうとする意欲が、鬼火のように燃えていた。それは、私のような素人にも興味深い優れた辞典に結実した。哲学者飛田就一が、全力を傾注した業績だといえる。

私が'84年に体調を崩してニトロ依存の情ない状態だった'88年ごろ、いま思い返すと私の「リハビリテーション」を意図したのであろうが、私としては4年ぶりの東京へ私を拉致して、出版社の社長・友人（哲学者）やドイツ人もまじえた食事の機会をつくってくれた。ひさしぶりの東京での楽しい2日間であった。ところが東京を去る直前にくたばりかけた私に、新幹線の車中、たいへんな気遣いをしてくれた。その後、間もなく、彼が'70年に翻訳した『ヴィトゲンシュタインと現代哲学』（法律文化社）の原著者 Justus Hartnack 教授から直接贈られた原稿 **HUMAN RIGHTS**（1986）を私に見せてくれた。著名な哲学者であり、アメリカ・カナダおよびヨーロッパの多くの大学で客員教授として哲学を講じているこのデンマーク出身の著者の英文を見ろとのことであった。やがてこれは、翻訳・出版という話になり、素人の私にも一部分担せよ、ということになった。まさかと思っていたが、英語を母国語としない著者の英文原稿に飛田さんといっしょに目を通しているうちに、罨にかかったように、つい手をだしてしまっていた。とうぜんのことながら、一見やさしいと思える文章も、いざ論旨の正確な把握となると、まったく別問題である。私が、少し試訳して放っておいたところ、とつぜん、東京から電話があり、先に会った出版社の社長も彼に代わって電話口にてられた。驚いて目が覚めた私は、その日から正念を入れかえて仕事にかかった。ひさしぶりの根気のいる仕事だが、体調を押し量りながらやっているうちに、期限オーバーの期限内に、ようやく終わることができた。もちろん、この本については、私の能力が彼ともう一人の共訳者の足をひっぱることになった。

不思議なことに、これを機会に、私の病気は治癒しないまでも、大学および同僚の方々に大きな迷惑をかけないところまで校務を果たせる状態にもどった。

どうやら、飛田さんは、私にリハビリテーションを課し、機を見定めていっきに仕事に追い込み、気力と体力を回復させるスケジュールを組んだのではないかと思う。『人権・正義・国家』（富士書店、1990年）についてご迷惑をおかけしたことを、この場をかりてあらためてお詫びし、また、その際のあの「心やさしい陰謀」ないし「思慮深い策略」に感謝いたします。

中国・旧満州に残された「残留孤児」が来日し、連日のように親・兄弟・姉妹・縁者との再会に一縷の希望を託してテレビで訴えていた頃は、真にせまる悲喜こもごものドラマがあった。そんなある日、私の研究室に入ってきた飛田さんは、書棚にふと見つけた清岡卓行の『アカシアの大連』を手にとって「この本は繰り返し読んでるんや」といつになく感情のたかぶりをことばに響かせて、アカシアの並木やその白い花の甘い匂いに染まった生まれ故郷を思いだしていた。それからしばらくして、私が彼の研究室を訪れたとき、椅子にどっかり背をもたせかけ「最近テレビで異国にとり残される運命をたどった人々を見てみると、人事とは思えんのか。自然に涙がでてる」とつぶやいた。やさしい人である。哲学者は、人間を探究し、自らを見つめ、他者

に共感する度合いがはるかに強い。当時、彼は、残留孤児のために、物心両面の援助を密かにしていたはずである。

飛田さんと私の不思議な縁はまだ続いている。'84年に私が心臓をいためると、そのような縁はもたなくてもよいのに、彼は律義にも'91年に心筋梗塞をおこした。さらに、これは人の世の常だが、彼の賢母と私の母は'89年のほぼ同じ頃に入院したまま、主たる病気は心臓疾患がもとで'92年、またしても同じ年度に亡くなった。ただ、ここで異なる点は、一人は大の孝行息子、他は親不孝者ということであった。

飛田さんの定年退任を記念して、このあたりで、私たちの「奇縁」には断絶宣言をし、あらたに第二次長期友好関係を締結すればよいのではないかと思っている。

飛田さんはいま、心臓病と闘っている。主治医に対しては格別の優等生であるにとどまらず、自らの病気に対する探究心は、それ自体が別の病気と思えるほど、徹底している。フィロソフイの原義が彼の脳髓に付着して、その機能の一部となっている。心臓の機能にはじまり、治療法、薬剤、リハビリテーションなどについては、膨大な資料を集めて研究し続けている。本来、生薬強心剤「救心」と「熊の胃」以外に西洋医学の薬剤に頼らなかった私も、すでに10年以上にわたって10種類を越える薬を呑み続けてはいるが、その一つひとつがどのような効果をもつのか、また心筋症、高血圧症——いまは「鬱血性心不全」——についても深く究明しない。このような横着者あるいは医者まかせ型の私には、飛田さんのこのジェンナー型の飽くなき探究心は、まさに感嘆・驚異である。

先日、数点の分厚い資料が、美麗種切手をやたら貼りまくってなお「料金不足 220」で届いた。差出人・飛田就一。30冊の医学書から選りすぐった心不全関係資料の膨大なコピーであった。一枚の手書き便箋に、

「しっかり学習しておいてください！」とあった。お礼の電話をすると、
「熟読玩味せよ！」とふたたび冗談を装った調子の檄が飛ぶ。

ありがたいことだ。この好き縁に心から感謝します。

飛田就一さんの、これからのご健康と心機一転のご活躍を祈念します。あわせて、滋味溢れるご叱責・ご指導をお願いいたします。

1994. 10. 20